わが家

一幕

森本　薫

人

由紀
邦子
行道
喜美子

日本間に洋家具をいれた客間。
隅っこに卓上電話。窓越しに庭がみえる。
石炭ストーブ。冬の午後。

電話のベルが一寸鳴る。

由紀。三十九歳。

由紀　（手紙の束を持って現れる。電話の方へ行こうとするが、おや、違ったかな、と云う風に立止る。窓の所へ行き、手紙の束を繰ってみる。その中一つが彼女の注意を惹くらしい。電話のベルが鳴るので掛かる）はい。はあ、左様で御座います。え？　あら、どうも失礼致しました。御無沙汰を致しております。は、御蔭さまで……。はい、え？　お向いですね、承知致しました、一寸どうぞ……（受話機を置いて）ねえや！　お向い、電話だって、そう言って頂戴。（ストーブの傍へ行って、がたがた火をいじってみる。じっと頭を押さえて考え込む）

邦子。四十一才。

邦子　（いきなりとび込んできて）おおッ！　此処は暖いわねえ。外は大変よ。道一つ横切るのが一仕事。戸口んところで立止って風が一吹きさあっと吹き過ぎた合間をねらって飛び出すのよ。

由紀　お姉さん、相変らず大きな話。

邦子　相変らずさ、そうそう相変っちゃあ、たまらない。お前さんだって相変らず落ちつき払ってるじゃないの。尤もあなたの方はストーブのはいった部屋でのうのうとやってるから落ちつき払うわけだが、あたしんところじゃそうはゆわない。

由紀　ストーブは、今日は、お父さんがいれろとそう被仰ったんですの。

邦子　何さ。有るものは使うことが第一、お祖父(じい)なんか、そう言ったって、言わなくったってさ。あたしんとこは無いが悲しさで……（笑う）大変！　何をしにきたことか……（電話に掛かる）はい、何方？　誰？　あたし邦子。え！　ははは。そう、失礼々々。うむ。うむ。うむ。若葉会ね。はあはあ。そこに誰々がいるの？　うむ、うむ。何処だっていいじゃない。ええ、あたし？　意見なし。委す委す。いやだよあたし、あたしはお客だろう。ああ。あたしの希望？　そうさ、お金が要らなくって、面白くって、ゆっくり遊べて、旨い物が喰べられて珍しいとこであんまり歩かなくって、だって歩くんだったら困るよ、あたしは、肥ってるんだからねえ。はは、あ、そう、よろしく。（切る）と。

由紀　（窓の傍え行ってじっと外をみていたがふり返って）若葉会ですの？

邦子　そうらしいの。帰ってきたんで歓迎会なんだって。こないだからそう言ってるの。

由紀　何処かへお出掛け？

邦子　寒いからね、外出（そとで）もどうかと思うわね。いっそ何処かで芝居でもみせてくれれば、暖かで面白くって、世話がなくっていいだろうに。

由紀　それじゃあね。

邦子　いけないかい？

由紀　いけなかないでしょうけれど。

邦子　そう、そりゃ、そうね。やっぱり……。

由紀　でも季節が季節だし。

邦子　なに、連中季節なんかどうでもいいって呑気坊ばかりよ。

由紀　仕合せですね。お姉さんは。

邦子　何うして？　え？　あ、それ。それは、あたしもそう思っている。みんないい人ばかりだからね。有難いわ。

由紀　お友達があるっていうことはいいことですわ。

邦子　それゃそうさ。ほんとうにね。あなただって……。

由紀　あたしにはありませんもの。

邦子　そうしようとしないからさ。あなたさえその気になりゃ、仲間入りだって出来るじゃないの。ほんとうだよ、ちょっとその気になりさえすれば、案外すらすら行っちゃうもの、それは。気の持ち方よ。

由紀　駄目ですわ。あたしは、みなさんとのお交際なんかとても。

邦子　そんな気がするだけさ。そんなものじゃないさ。あたしだってなにも。

由紀　お姉さんは、それでいいんですの。お姉さんとあたしとは違いますもの。

邦子　――。

間。

邦子　（戸口の所へ行きながら）お祖父は？

由紀　まだお下りになりませんの。

邦子　御殿？　寒いのに御苦労様なことだ。御殿だって、何にも用はありあしないんだろうにね。体にさわると大変よ、今頃は。

由紀　昼過ぎにお使いがありましたの。開祖の御年会の相談とか、何とか。

邦子　何だい、開祖のそりや。

由紀　あら姉さん。

邦子　あ、そうかそうか。あたし、お寺のことなんどすっかり忘れてるんだよ。去年もやったっけね、そんなこと。

由紀　一昨年もありましたわ。

邦子　そうそう。そうだった。毎年やるのかい？

由紀　そうですって。

邦子　変だねえ。何時頃からそんなことをやり出したんだろう、ほんとうに憶えない。

由紀　さあ。七年、八年ももっと前からでしょう、それは。随分古い筈ですよ。

邦子　七年と。ああ、それなら憶えない筈だ。

由紀　あら。

邦子　（笑って）丁度、あたしのいない間よ。

間。

由紀　御免なさい。どうしてこう、後先を考えないんでしょうあたしは。

邦子　何さ、何でもないじゃないか、そんなこと。一々そんなにこだわらないで欲しいよ。あたしの方じゃ何とも思ってやしないのに、お前さんの方でそんな気を廻して呉れちゃこっちの引っ込みがつかなくなる。

由紀　ほんとに。つまらないことばかり言って済みません。

邦子　それを止すのよ。いけないわ。何か言うと謝るのよ、あなたは。あなたが一生懸命で謝ってる事は何時でもちっとも謝る理由のない事なんだ。何時でも自分の為ることがいけない、とそう思ってるわけじゃないでしょう。そんな人って無いと思うの、あたしは。だからね、可笑しな話だけど、あなたに謝られると、あたし妙な気がするの。

由紀　妙な気って？

邦子　ちょっと言えないんだけど、言わなくてもいいことじゃないの、それ。

由紀　そりゃ、そうですけれど……。

邦子　何、言ったっていいことさ。隠すことはありゃしないからね。改って言うと変に聞こえるけれど、なんだか、ね、あるでしょう。皮肉みたいな。

由紀　あら、そんな……。

邦子　そう、そりゃわかってるの。だからね、あなただって、人の気を汲みすぎて悪く取られちゃ、分が悪いだろう。だから、そう言うのよ。したいようにしようよ。ねえ。

由紀　ええ。済みません。

邦子　あたし達姉妹（きょうだい）なんだろう、ね。

由紀　――。

邦子　気兼ねをしなきゃならない人間がいるなら……あたしじゃないの

由紀　嘘、お姉さんはちっとも。

邦子　有難う、本当の姉妹みたいな気がしてよ。もうすこしってところね。

由紀　あたしがいけませんの。

邦子　だめだめ、また元へ戻る。お祖父が帰って来たら知らしてね。

由紀　ええ、何か？

邦子　ええ、一寸相談したいことが。

由紀　……そうですか。

邦子　――。（去る）

由紀　……（ストーブの傍へ返る。先刻の手紙を取り出してじっと見ている）

邦子　（戻って来て）やっぱりあなたに言っとこう。その方がいいと思うから。あたしんとこ、駄目なのよ。お金が欲しいの。あなた、機会（おり）があったら、お祖父にそう言っといて呉れない？

由紀　まあ。でも、どうして……何のことですの、それ？

邦子　立人（たつんど）が失敗（へま）やったらしいの。工場の方よ。新しい機械をずっと据えつけたところが、土台が悪くって混凝土（コンクリート）がすっかり割れちゃって駄目なんだって。機械が動かせないの、だから。

由紀　まあ。

邦子　弱ってるのよ。

由紀　そりゃね。大変ですわね。

邦子　こっちへは聞かせたくないのよ、立人の了簡はね。でもそんな場合じゃないからあたし、お祖父を揺ってみようと思うの。そんな場合じゃないわ、ほんとに、生きるか死ぬかって場合なんだから。

由紀　大袈裟ですね、お姉さん。

邦子　大袈裟なもんか。はっきり、聞いといてね、冗談でなしにだよ。

由紀　ほんとにね。でも、あなたの話、まるで冗談みたいで……。

邦子　笑うもんじゃないよ。しようと思えばそんな風に出来るのよ。本当に死にそうにもね。でもあたしにゃ似合わないだろう。それこそ可笑しくって……。

由紀　ま。（笑う）

邦子　また笑う。冷い人だ。

由紀　兎に角言ってみますわ。でも、あたしじゃ……とても……あたしは駄目なんですの。

邦子　あなたには遠慮してるわ。でも、駄目なものなら誰が言っても駄目だから仕方が無いとは思ってるのよ。

由紀　でもまさか……。

邦子　子供だものね。呉れる筈だったものを呉れれば、それでいいわけなんだが。

由紀　ええ、それはそうですが。
邦子　悲観してるわけではないのよ。
由紀　それは。
邦子　（引きとって）そうみえる、だろう。（笑いながら行きかける）
由紀　お姉さん。
邦子　？
由紀　いいえ。止しますわ。
邦子　そうかい。何のことだかわからないけど。（去りかける）
由紀　やっぱり、聞いて戴きますわ。こんなこと、いけないかもしれないけれど。
邦子　（少し不愉快になって）いけないけれど、何なの。
由紀　喜美子。喜美子ね。
邦子　ふん、喜美子が、どうかした？
由紀　まあ見て下さいな、これを。（手紙を出す）
邦子　何さ。え。（裏を返してみる）誰？　この人。男の人なのね。
由紀　わかりませんの。
邦子　あなたのしらない人？
由紀　ええ

邦子　ありがと。（返す）
由紀　どうしたらいいでしょう。
邦子　わからない。あたしには。
由紀　ねえ、意地悪を言わないで。
邦子　そうじゃない。一つのやり方はあなたが知ってるでしょう。お祖父があたしにやった仕方だ。
由紀　お姉さん。
邦子　あなたに、何か言ってるんじゃないのよ。悪くとらないでね。幾つ？　十……
由紀　九ですわ。もう、あたしの思うようにはなりませんわ。
邦子　まだまだ、あの子は、そんなんじゃない。
由紀　この頃はだんだんあたしから離れて行くような気がしますわ。
邦子　あたしにはそんなにみえない。素的な子だよ、あれは。
由紀　あの子もそう言ってます。素的な叔母さんだって。あの子はお姉さんに夢中なんです。
邦子　冗談じゃない。あたしも年を取ったなあ。姪の事件に口を出すようじゃ、おしまいだ。で、何時頃からなの、それは。
由紀　気が付いたのは最近ですけれど、相当前かららしいんですの。
邦子　読んでみたの？

由紀　いいえ。でも読んでみようかと思うんです。

邦子　親だからね。すれば出来るわけね。

由紀　いけないでしょうか。

邦子　何とも言えない、あたしには。読もうと思ったら読んでみるといいわ。思ったとおりにするのよ。

由紀　姉さんだったら？

邦子　（笑って）自分が駄落者だから困るねえ。

由紀　──。

間。

邦子　も少しそっとしておかない？

由紀　──。

邦子　この頃の女の子は大丈夫よ、割にその辺は考えてると思うの。それをね、傍っから変につッつくと却って妙にやり損ってしまうようなことになりゃしないかしら。

由紀　ええ。でも、まだ子供ですから。

邦子　親の目からみると子供は何時まで経っても子供よ。ところがやっぱり子供は子供なりに

大きくなってるじゃないの。お祖父からみればあたしはまだ、あん時無茶をやって飛び出したままなんだよ。それだのに、もうあたしの姪が男の人から手紙を貰ってるのよ。

由紀　驚くじゃないの

邦子　驚いてる場合じゃありませんわ。

由紀　驚くね、あたしは。驚かないじゃいられない、ほんとに。

邦子　心配なんです、あたし。

由紀　あたしなら……。

邦子　聞かして下さいなな。

由紀　笑うだろう。

邦子　笑やしませんわ。

由紀　訊いてみるわ。お前の好きな人は背の高い人かい？　教養の高い人かそうでない人か？

邦子　お前の好きな人は笑う時にはどんな顔をするの？　その人の持ってるものの中で一番好きな所は……。

由紀　あたしにはそんなことは出来ませんわ。

邦子　（興醒めて）前以って言ったとおりだろう。

由紀　そんなこと気をつけてないかもしれませんねえ。

邦子　これから気をつけて見るだろう。いろんなことが見えて来る。

由紀　もし一々返答したらどうしますの？

邦子　そうかと思っとくさ。そこ迄気をつけてみてるなら、いいじゃないか。

由紀　思えやしませんわ、親なら。それに、そんなにしといたら親を莫迦にしましてよ。

邦子　そうかしら。したっていいでしょう。それは、もしそうなら、子供の方が間違ってるのよ。

由紀　いいえ、そこばかりじゃありませんわ。もっと前のところから間違ってますわ。

邦子　あの頃とちっとも変ってないわねえ。

由紀　――。

邦子　あたしの後から、始終ついて歩いてたわ。

由紀　旦那様が御心配でしたから……。

邦子　大事なお嬢様だったんでしょう。

由紀　ええ。

邦子　御免なさいね。あたし、悪いお嬢さんだったわね。あなたにはいろいろ、他人の知らない心配をさせたわけね。自分じゃちっとも気がつかなかったのよ。

由紀　――。

邦子　何も彼も昔だねえ。

由紀　――。

邦子　喜美子のことはも少し、みている方がいいとあたしは思う。自分で責任を持たせるようにしたら。

由紀　そうでしょうか。それはあたしだって何も……。

行道、六十八。紋服、袴。

由紀　お帰りなさいまし、ちっとも知らなかったもので……。

行道　う。寒い。その、う、ストーブの蓋を開けて呉れ。

邦子　お祖父さん、無茶よ、そりゃ。毒だ。

行道　毒でも、なんでも、構やせん。俺は、なんかしらん、冷えたままで元へ戻らんような気がしてるところだ。

邦子　大丈夫、まだまだ死にゃしない。

行道　お気の毒様だ。俺も、もうすこし死にとうはない。（ストーブに手を焙る）

由紀　熱ッ！

邦子　そら、言わないことじゃない。駄目々々その手つきでは。惜してごらん。そら、この呼吸だ。

行道　ふん。そういうことは、お前の方が、成程巧いものだ。それにお前が買い込んだ道具だか

らな。

邦子　でも割に気に入ってる様子じゃないの。

行道　そうでもないさ。有るから使うだけのことだ。それに（椅子を引き寄せ）椅子の上に坐るなんて、芸当は（椅子の上に上らうとする）

由紀　袴をお取りになった方が。

行道　ふん。（袴を取りにかかる）あんまり賞めた型でもないだろう。

邦子　上らなくたって済むのよ。

行道　習慣さ。電車に乗ったって坐るのさ。この部屋だけ腰を掛けるっていう区別は立たんよ。

邦子　（見廻して）この部屋、あんまり受けがよくないらしいのね。

行道　畳の表替えの要らんところだけ賛成だよ。みんなみんな反対なわけじゃないさ。

由紀　少し暖まりまして？

行道　なに凍ってたのが溶け出したところさ。

邦子　御用はもう片附いたの。

行道　追々片附くだろう。まだかかったばかりだ。末のお姫（ひい）様の奴俺に林檎を呉れたよ。二つ持って来て一つ呉れるんだ。こっちは食べられないから爺に呉れようだとさ。俺はそう言ってやったよ。爺に要りませんから剥いて差し上げましょうってね。

邦子　面白いわね。それでどうしたの。

行道　お前の面白がるのはその辺のところだろうな。ああ、どうも眼が霞んでいかん。

邦子　逆上（のぼ）せたのよ、きっと。いきなりむんむんするところへ入って来たもんで。

行道　なにそうじゃない、俺のは持病だ。

由紀、袴と羽織を持って去る。

邦子　少し開けましょうか。

行道　出て行ったね。あれは何時もそうだよ。ああいう女なんだ。俺が身体のことを言い出すと成可く近附かん方針を取っているんだ。

邦子　そんなことを言うもんじゃないわ、お祖父さん。

行道　邦子。この家で俺をお祖父さんと呼んでいいのは喜美子だけだ。覚えといてくれ。

邦子　どちらでもいいじゃないか、そんなこと。

行道　どっちでもいいようなものだ。俺は好かんよ、しかし。

邦子　少し開けてよ、よくって？

行道　俺は最近死ぬかもしれんよ。

邦子　死なないって言ってるじゃありませんか。

行道　俺は時々全く眼が霞んで了って見えんようなことがあるよ。盲目になって生きてるんな

ら、死んだ方が楽だな。

邦子　度々なんですか？

行道　だんだんひどくなるようだ。

邦子　眼だけですの？

行道　眼だ。眼科だよ。（何か待っている）

邦子　年の所為よ。

行道　（がつかりして）年さ。年だよ、そりゃ。俺以上の年で何でもない奴もいる。

邦子　九十八で娘道成寺を舞う女の人が新聞に出てたけど。

行道　ふん。そうさ、そんなのもいるさ。

邦子　一度医者にみせてみればいい。

行道　この家じゃ誰もそうは言わんよ。

邦子　恭（やすし）に言えばいい。

行道　あれは、由紀の亭主だよ。第一、この頃彼奴は家にいたことはないじゃないか。晩飯を喰うか喰わないで玉突だ。

邦子　由紀さんだっていいでしょう。

行道　あれは、俺には構わんようにしてるのさ。構うとうるさいからな。

邦子　お祖父さんの言うことに逆（さから）ゃしないでしょう。

行道　逆ゃせんさ。絶対に逆ったことはないよ、それはね。相手にしないだけさ。

邦子　気が付かないのよ、あれは。

行道　気が付くと損をするからさ。

邦子　損なんか、誰れもしやしない。

行道　鍵を委かしたのが不運だ。早くやりすぎたよ。早くな。

邦子　遅過ぎたくらいだわ。どっちかって言えば。

行道　その仇（かたき）を討たれているのだ。女房が生きていればな。

邦子　同じことよ、そんなこと。

行道　お前は長い間家におらんからだ。

邦子　覚えがあるの？　仇を討たれるような。

行道　俺が、自分で家をやっていたことが長い間気に入らなかったのだ。俺は知らんわけではなかったよ。あれ達は俺の見えない所では始終内緒話しをしていた。何を言っていたか俺にはよくわかっているんだ。あれ達が俺をみる目はきまってた。未だか？　という目つきだ。どうかすると未だ死なんのかという目だったよ。

邦子　そんな、莫迦なことがあるものか。そんなに僻んじゃ駄目よ、ほんとに。

行道　お前は少し無遠慮だな。

邦子　そうかもしれないわね。でもあたしが言わなきゃ言う人がないからよ。お祖父さんの損

だ、それは。

行道　得をしたって先は知れてるさ。今迄損ばかりして来たのだ。今更得の仕様も無い。

邦子　もっと好かれるようにしなくちゃ……。

行道　好きゃしないさ、どんなにしたって。それに俺は人の気嫌を取るのは下手だ。この家じゃ、みんな俺の様子をうかがってるようだ。その癖俺が一歩足を踏み出すとそしらん顔をしている。孫の喜美子でさえ俺には近づきゃせんよ。あれは俺が恐いんだ。みんながそうするからな。どら、着物でも着換えてくるか。（と立ち上って、戸を開くと其処に由紀が立っている）おや……ここにいたのかね。

由紀　いいえ、あたしたった今……。

行道　いいさ、いいさ。何も聞かれてわるい話じゃないんだ。

由紀　（入って来て）何か被仰ってましたの？

邦子　いいえ、別に。

由紀　あたし、薄々はわかりますの。

邦子　あたし、かくしゃしないのよ。唯何を言っていいのかわからないの。

由紀　お姉さんは長い間、家から離れてらしったからおわかりなりませんわ。

邦子　あたし、解ろうと努めてるのよこの頃。

由紀　お父さんもお変りになりましたわ。

邦子　そうね、変ったわ随分。

由紀　お姉さんが、ずっと家にいて下すったんだったら。

邦子　同じことだ、そりゃ。

由紀　そんなことはないと思います。

邦子　あたしの所為？

由紀　あたしの所為なんです。あたしの仕方が拙いんですわ、きっと。

邦子　そんなことはない。恭が下手なんだわね、きっと。

由紀　そうかもしれません。あたしがこの家の家族になったのが、そもそもの間違いだったのかもしれませんわ。

邦子　だってお祖父さんが望んだんじゃないの、それは。

由紀　そうじゃありません。どうでも、よかったのですわ、旦那様は。

邦子　だけど少なくとも恭は……。

由紀　お兄様のような男の方もあり、あの人のような男もいるんですわ、世の中には。あの人に取っても結婚なんてどうでもよかったんですわ、きっと。

邦子　あなたも嬉しくなかったの、それじゃ。

由紀　あたしは嬉しがらないわけはありませんわ。あたしにしてみれば雇人から主人になるんですものね。

邦子　ああ。そんなことは言わなくても済むことだのに。

由紀　お姉さんが、何処かへ行っておしまいになった時にお父さんは、もう何がどうなったって大した問題ではなくなったのです。そういう時に、丁度そういう時にあたしを、お父さんは家族になすったのです。それはあたしの所為じゃありませんわ。でも、お父さんにはそれが忌々しいんですわ、きっと。それがあたしの所為みた様にみえるんですわ。本当はお父さんの無分別でしたのにね。だからお父さんはつい先頃迄御自分で鍵を持ってらっしゃいました。それは、つまり……あたしが。

邦子　あなたって、そんな風に、黙ってお祖父を見て来たの？　気味が悪いわ。

由紀　何時の間にかそうなったのですわ。初めっからそうではありませんでしたけれど。

邦子　あなたは、お祖父に同情しないの？　可哀想だと思わなかったの？

由紀　思いました。今だって思っていますわ、それは。

邦子　（少し笑って）そうね。それは、あなたは忠実だったわ、お祖父には。

由紀　お姉さんには悪うございました。

邦子　仕様が無いわね、両方いいってことはないものよ。

由紀　でも、お父さんにはあたしがそんな風にしたことも、やっぱり気に入らなかったのです。

邦子　どんな風に？　何さ、そりゃ？

由紀　――。

邦子　も少し詳しく言ってみない？　よくわからない。

由紀　あたしがいろいろしたことが、よけいなおせっかいだったのですわ。あたしもそれ、この頃ほんとにわかってきましたの。

邦子　そりゃ、ひどい。そんな風に、言うの？　お祖父がそんなことを言うの？　それなら。

由紀　被仰いはしません。

邦子　しかし、そんなんなら。いや、あたしにはわからないよ。あなたがそんな風に……。

由紀　いいえ。あたしには分るんです。言われないことですけれど、なんか分りますの。それに、そういうお父さんの気持が了解出来てきましたの。お父さんにしてみれば、無理のないことですものね。それに、あたしは、それをどうして差上げることも出来ないのです。

邦子　でも、それじゃ、あなたに言い分があるでしょう。

由紀　――。

邦子　あったって言わないだけね。

由紀　いいえ。そうじゃ……。

邦子　それを聞くのはあたしよ。しかし聞かなくってもわかってよ。あたしの考えが足りなかったんだわね。いろんな、思いも掛けないことが起って来てるんだもの。そこ迄は、とてもとてもそこ迄は考えられなかった。

由紀　ええ、あたしだって、いろいろ思いも掛けないことばかりでした。

邦子　御免なさいね。

由紀　あたしこそ。

邦子　美しいわね、こうしてると。でも、その割に仕合わせで無いのね、あたし達。

由紀　──。

邦子　お祖父さんね、眼が悪いんだって言ってるでしょう。

由紀　ええ。

邦子　あたしは医者はみせた方がいいと思うけれど……。

間。

由紀　姉さん。（間）気が付かない、と思ってらっしゃるでしょう。

邦子　──。

由紀　あれは、体から来てるんですわ。だから眼だけじゃ駄目なんです。恭もそう言ってますの。お父さんは眼だけだ眼だけだって被仰てますけれど。

邦子　──。

由紀　大学病院へでも行くのなら、眼科と身体の方をかけて行かなきゃなりませんわ。一日仕

事事でしょう、御辛棒なさいませんわ、きっと。

邦子　じゃ、眼科だけでも、気休めでもいいじゃないか。

由紀　云っても無駄だと思いますけれど……。無理にって云うと……。

間。

邦子　（白けて）そうね。済まなかった。

喜美子。十九。

喜美子　只今。（変な空気に一寸気まづく、出て行かうとする）

邦子　おや、喜美さん、いいじゃないか、出てかなくったって。

喜美子　ええ。でも、お話してるんでしょう。

邦子　聞かれたっていい話さ。（笑う）

喜美子　そう。二人とも、じっと考え込んでるんだもの。重大事件かと思った。

邦子　そうじゃないさ。話が切れたところさ。よくあるじゃないか。妙に話がなくなっちゃって、何を言おうかなあ、って一生懸命考えてみたりして、それで結局飛んだ話をしてし

まったりするってことが。

喜美子　あるある、そういうことはね。

邦子　あれさ、あるだろう、時々ね。可笑しな話だが…。

由紀　遅いのね。

喜美子　（腕時計を見ながら）ううん。そうでもない。ほんの少し。

由紀　何処かへ、寄ったの？

喜美子　ちょっとだけ。（笑う）

由紀　何処？

邦子　いいとこ？

喜美子　ええ。いいところ。ふふ。

由紀　いいところなんて所はありゃしない。

邦子　――。（ちらりと由紀の顔をみる）

喜美子　――。（尋ねるように邦子の顔をみる）

邦子　（喜美子に、手で顔を撫でながら）何か附いてるかい？

由紀　何にも附いてやしません。

邦子　あなたもよ、何にも附いてやしないよ。

喜美子　ははは……。

由紀　大きな声。

喜美子　だって……。

邦子　可笑しいよ、全く。ふ。どら、一度帰って来よう、根を下しちゃった。（去りかける）御飯をかけなくちゃ。

由紀　お姉さん。

邦子　え？

由紀　今の話、兎に角お父さんに言ってみますわ。

邦子　ああ、その方がいいと思うね。得心づくならね……どうせ。（出ていく）

喜美子　何の話？

由紀　何だっていいでしょう。

喜美子　秘密主義ね、母さんは。

由紀　聞いたって、仕方のない話です。

喜美子　隠すとね、よけい聴きたくなるわ。

由紀　隠しやしない、誰も。そんなことを言うものじゃないわ。

喜美子　ええ。悪かったわ。そう思ったとたんに言って了ってたの。御免なさい。

由紀　――。

喜美子　あたしね、スケートやってきたの、ちょっとだけ。ほんのちょっぴり。

由紀　そんなことだろうと思っていたよ。
喜美子　怒らないでね、今度から為ないから。
由紀　今日だけ例外。する時だけは何時でも例外でしょう。
喜美子　いや、母さん。（出て行こうとする）
由紀　喜美子。
喜美子　なに？
由紀　あなたに、手紙が来てる。
喜美子　そう、有難う。（卓によって、その上に投げだしてあるのを一つ一つ取り上げてみる）ほう、いやにくねくねした変な字だなあ。ちっとも読めやしない。こんなのが達筆を振ったところね。
由紀　それはお祖父さんのよ。
喜美子　成程。（問）さあ、っと。（去ろうとする）
由紀　まあ掛けない？
美子　（用心して）ええ。でも……。
由紀　その人、お友達？
喜美子　――。
由紀　学校時分の友達？

喜美子　ええ、まあ。

由紀　この頃よく手紙よこすのね。

喜美子　――。

由紀　何だってそんなによく寄越すの？　他の人からはちっともきやしないじゃないの？　あなたもそんなに、度々手紙を書くの？

喜美子　……いいえ。でも、それは……。

由紀　母さんが安心出来るように、一寸読んで呉れない？

喜美子　――。

由紀　いけないの？

間。

喜美子　（由紀の前へ黙って手紙を置く）

間。

由紀　母さんは古いかもしれないけれど、女は女らしくして貰いたいの。母さんに尋ねられて答えの出来ない様な事はしないでおいて下さいね。学校へ出ていくら新しいことをなら

ったって、女らしくなければ結局学校なんて仕様がないのよ。学校でスケートを教えやしないでしょう。（立ち上る、戸口へ）

喜美子　あたしスケート、ほんとに止すわ。

由紀　スケートのことを言ってやしません。（去る）

喜美子　（ぼんやりしている）

行道。

行道　眼鏡を、眼鏡を置いてやせんか、俺の。

喜美子　――。

行道　袴を取って、置いたようにも思うが……ないかな。すると、御殿か。おい、どうかしたのか？

喜美子　（笑って）いいえ。なんでも。

行道　――。（手紙をみる。それを持って去ろうとする）

喜美子　お祖父さん。それ、あたしの。

行道　どれだ？　これか？

喜美子　そっちよ。白い方。

行道　（一通投げ出して出て行く）遅いぜ、今日は。

間。

喜美子　（手紙を裂き、ぼんやり卓の上へ置く。泪が出てくるので手の甲で払う。拭いても拭いても出てくるらしい）

邦子。

邦子　ここにいたの。あなたあれしらない？　糊の刷毛。障子を張る時に使うあれよ。あなた何時かいじってただろう。

喜美子　――。

邦子　あたし障子を張り替えるのよ。あなた手伝って呉れない。玄関のと台所と、二階の窓と、大仕事だから（喜美子の肩に両手を置いて）みっともない。洟が出てるよ。（ハンカチを出す）さあ。

喜美子　――。（受け取る）

邦子　洟をかむのよ。

美子　汚れるわ。

邦子　汚れてるからいいよ。

喜美子　（鼻の下をおさえて）有難う。（返えそうとする）

邦子　ついでに眼のとこも拭いて欲しい。そうそう、それでいい。可笑しな顔よ。鏡持ってないの？

喜美子　あっちに置いてきたの。

邦子　そりゃよかった。みたら恥しくなってよ。あんまり度々してみせる顔じゃないねえ。

喜美子　叱られたの、あたし。

邦子　何処で遊んでたの？

喜美子　スケート。

邦子　スケートって、山でやる、あれじゃないの？

喜美子　そうじゃないわ。あれはスキー。

邦子　はあはあ。あなたはどう、上手い方なの？

喜美子　下手じゃないわ、どっちかって言えば。

邦子　氷の上をごろごろやるんだろう。ありゃあなた、男のやることだ、危い。

喜美子　女だってやってるわ。

邦子　そうかい。驚くね、この頃の女の子には。男のやることは何だってやってみるんだねえ。

あたし達の時分にはスキーなんていうのは。

喜美子　スケートよ、叔母さん。

邦子　スケートさ、そう言わなかったかい。

喜美子　でもね、あたし、もう止すわ。ほんとに止すわ。

邦子　どうして。面白けりゃ止さなくったっていいじゃないの。

喜美子　止すの、どうしてでも。

邦子　叱られるからかい。

喜美子　それもあるの。でも、そればかりじゃない。

邦子　考える所あって？

喜美子　ええ。（笑う）

邦子　――。（喜美子と並んで坐る）

間。

邦子　あなたの母さんは……怖い方かい！

喜美子　ううん。そうでもないけど。

邦子　あれで、上等の方じゃないかしら。そう思うけど。

喜美子　そうでしょうか。

邦子　そうは思わないのかい？

喜美子　ばっとした所が無いわね、もうひとつ。

邦子　生れつきは仕様が無いさ。

喜美子　とっても静かに歩くのよ。跫音がしないくらいよ。お部屋にいるでしょう、何にも知らないで立ち上ると後に立ってたりするの、びっくりする時あってよ。

邦子　そうかい。まあ、そういうところは、あるね。

喜美子　あたしはまたそういうところがちっとも無いの。二階へ上るんでも一つづつ歩いて上れないの。すぐ飛んじゃうの。

邦子　叔母さんもそうだったよ。今でも癒らないねえ、そういう癖は……。

喜美子　そうですってね。そうだってきいてた。

邦子　誰が、そう言って？

喜美子　お祖父さんがそ言ったわ。これは邦子の子供に生れる筈だったんだろう、って。邦子って誰だかわからなかったわ、あたし。叔母さんがお向うへ引越してくる迄誰もそ言って呉れなかったんだもの。でもすぐ、わかっちゃったあたし。

邦子　お祖父さんは、可愛がって呉れるんだろう。

喜美子　独りでいる時は……。

邦子　？

喜美子　お父さんでもお母さんでもよ。お祖父さんだって、独りの時は可愛がって呉れるわ。でも他のひとがいると、そんなに可愛がらないの。お祖父さんが一等ひどいの、それは。叔母さんが来てから、みんなあんまり可愛がらなくなっちゃった。叔母さんだけよ。あたしやっぱり叔母さんの子なのかもしれないわね。

邦子　わからないわ。あたしには、そんなことってあるかしら。

喜美子　叔母さん、長い間家にいなかったからよ。

邦子　みんなそういうわね。あたし、そんなに長い間留守にしていたのかしら。その間に家で起ったことを何一つ理解出来ないほど……。

喜美子　わからないわ。あたしは生れた時から一遍もこの家を出たことがないけれど、やっぱりわからないわ。時々困っちゃうわ。あたし女らしくないんでしょう。それがいけないのかしら……（出ていこうとする）

邦子　あなたの所為じゃないのよ。（呼びかけて）喜美さんこれは？（卓の上を指す）

喜美子　（黙ってとり上げる）

邦子　（近寄って）母さん、心配してるのよ。悪く思っちゃいけない。

喜美子　ええ。ねえ、叔母さん。こう言うことは、とても悪いことなの？　そうらしわね。どうなのかしら。

邦子　善いことか悪いことか、あたしにはわからないけれど。危ないことよ、それは、気をつけなきゃあ、ね。スキーみたいなもんだ。

喜美子　叔母さん。ねえ。叔母さんにもこういうこと、あった？

邦子　叔母さんかい、叔母さんにはそういうことは……。ええ、あったわ、ずっと前にね。

喜美子　叔母さんの時は、善いことだった？　悪いことだった？

邦子　あたしは、なんとも考えなかったけれど……。どうやら悪いことだったらしいのやっぱり……。

喜美子　（頭を叩きながら）あたし……あたし……いけない奴かなあ。

由紀。

由紀　おや、まだここにいたの。

邦子　あたしがお喋りしてたんだよ。

喜美子　叔母さん、刷毛ね、糊の刷毛、あたしの部屋よ、持ってくるわ。

邦子　いいよ、あたしが取りに行く。

喜美子　いいわ。（去る）

由紀　――。（喜美子の後をみている）

邦子　いい子だわ、ほんとに……。
由紀　女らしい、ってところがありませんわ。
邦子　スキーに行くからって、そうは言えないさ。
由紀　感情ってものがないんですの。
邦子　あり過ぎるんだ、そりゃ……可哀そうに……。
由紀　お姉さんにはいろんなことを話すようですわね。
邦子　区別なんかしやしないよ、あの子は……。
由紀　あたしには、あんな風には、話しませんわ。
邦子　親だから却って言えないこともあるかもしれない。けど、あたしだって、なんにも言やしないよ。お喋りするだけさ。

行道。

行道　（新聞を拡げたままぶらさげて入ってくる）喜美子が部屋で泣いてる。
由紀　お姉さん。何か言ってまして？
邦子　いいえ、別に……。
行道　どうしたんだって訊いたさ。どうもしない、って笑ってたよ、涙を滚した顔でね。俺はど

うもあの子は好かんよ、なんだってあれは俺を恐がるんだ。

郁子　まさか……。

行道　怖がるよ。ところが俺ときたら、一度だってあの子を恐がらせようと思ったことはないよ。あの子を恐がらせたからって、俺の手柄にはならんからな。

由紀　あたし、行ってみてきます。

邦子　止した方がいい。

行道　行ってみるさ。泣いている娘の傍へ母親が行くと、どういうことになるか。

由紀　あたしは娘を甘やかしたりなんかしてやしません。行って叱ってやります。

行道　俺の所へ謝りに寄越すのは勘弁してほしいよ。益々俺を恐がるばかりだからな。

由紀　何だって、あの子は泣いたりするんでしょう。あたしは、あの子に何もひどいことなんか言やしません。あたしは自分じゃ穏やかすぎると思うほど柔しく言ってやったのです。それだのに何だったって泣くことなんかあるんでしょう。

邦子　悲しいからよ。誰だって悲しけりゃ、泣くよ。そりゃ。

由紀　自分が間違っているんです。自分が間違った事をしておいて、他人から注意されたからって、泣く法はありませんわ。

邦子　だって、それゃ無理よ。ねえ、無理だと思わない？　自分が間違ったって何だって、悲しいことは悲しいのよ。悲しけりゃ泣いちゃうよ。

由紀　我儘ですわ、それは。

邦子　おや。ここん家じゃ、悲しいからって泣くことも可笑しいからって笑うことも出来ないの。

由紀　善いことは善い、悪いことは悪いとはっきりしておかなきゃ……。

邦子　そんなこと、はっきりさせなくってもいいだろう。あの子は、あたしより賢いよ。あなたのしてほしくないことはしやしない。

由紀　あの子はあたしがいけないことをしたと思うでしょう、きっと。

邦子　あなたは善いことをしたと思ってるんだろう。だから、それでいいじゃないか。それからさきのことは誰にだってわかりゃしない。こんなことはなんでもないことよ。区別をつける必要はないんだよ、だから。あの子は一寸した奇麗な夢をみてたんだよ。あなたがそれを醒ましてやったんだ。だけどそれはそれだけの話よ。

由紀　――。

邦子　あたしは、自分のこと言ってるんじゃないのよ。

行道　喜美子はお前の子だと思っていたよ、俺は。ずっと前からね。

邦子　あたしにあんな子があったらねえ。

由紀　あたしだって、可愛いんですわ。

邦子　わかっててよ、それは。あの子だってあなたを愛してるさ。

行道　駆け落ちなんかしなかったところからみてもな。

由紀　――。（泣き出す）

行道　悪かったかね。

邦子　あたしは皮肉なんて何ともない。

行道　そうは思ってるよ。

邦子　お祖父さんは上手くなったねえ、昔からそんなんだとあたしあんなことしなかったかもしれない。

由紀　わかりましたわかりました。みんなあたしが悪いんです。みんな……（泣きながら出て行く）

間。

邦子　困ったことだ。

行道　俺も困るよ。

邦子　舞い戻ったのがこの身の不覚かな。

行道　すこしはよくなるかと思ってたよ、うちの中がね。

邦子　悪くなる一方だわねえ。以前はそうでもなかったんでしょう。

行道　なにそうでもないさ。お前が帰って来たんで俺が何か言うかと思ってるのさ。ところが、何か言うと俺はお説教を喰うだけなんだからな。お相憎さまだ。

邦子　仕様がないさ、そりゃ。

行道　以前、不仕末をして家を飛び出した娘が久し振りで家へ帰ってくると、今度は家中の人間に向ってお説教しなきゃならないんだ。お察しするよ、全く。恭の奴も時々はお説教を聴くのか。

邦子　あれのする話といったら、誰れそれが短期で何千円摺ったとか九州の暴風で人が何人吹き飛ばされたって話だけですよ。あれは玉突の他にすることはないらしい。

行道　これでこの家は、他の家に比べてどうなのかなあ。

邦子　まあ、普通じゃないのかしら。

行道　俺は不幸だよ。そう思う。

邦子　あたしの所為じゃない。

行道　いや、それもあるよ。

邦子　でも、あたしだって不幸。

行道　俺の所為じゃないよ。

邦子　そうとばかりは云わせない。

行道　お前は、お前のしたいようにしたんだぜ。

邦子　お祖父さんだって自分のしたいようにしたのよ。

行道　そうか。それで恨みっこなしか。それで誰も恨む所無しだな。全く、それはそうだ。

邦子　可哀そうなのは喜美子よ。このままじゃあの子はほんとに可哀想だ。

行道　あれに罪はないんだからな。運が悪いんだ。

邦子　由紀さんも可哀そうだ。

行道　俺は可哀想じゃないのか。

邦子　責任があるのは、お祖父さんとあたしよ。その他の人はね。

行道　ふん、成程ね。お前は以前よりは考え深くなったようだ。

邦子　此処へ帰ってきてからよ。

行道　いろんなことが変ってたからな。

邦子　お祖父さんが変ったのよ。

行道　俺は昔のとおりだよ。

邦子　由紀さんだって変ってやしませんよ。そう言い出すならね。それに恭も相変らずだし、それなら何が一体変ったと言うの？

行道　いろんなことの関係が変ったんだ。俺と由紀との、恭と俺との、由紀と恭との、恭夫婦と俺との、そういう関係がね。

邦子　それは、あなたが計画してあなたが変えたんじゃないの。

行道　悪い結果迄は計画の中に入れてなかったよ。

邦子　お祖父さんはもっと自分の周囲の人間をよく知っていなきゃならなかったのよ。ずっと以前にね。そう思わない？

行道　中でもお前に就いてはね、そうだろう。

邦子　言いたいことがあるならどんどん打ちまけて欲しいわ。

行道　以前俺は、丁度今のお前のように理窟一天張りで随分お前を悩ましたんだ。そうだろう。それが厭さにお前は此処を逃げ出したんだ、そうだろう。俺は長い間かかってそうと知った。それから後の長い陰気なこの家の空気を吸った挙句だよ。それが、ところが今度お前が帰ってきた。本当言うと俺はほっとしたよ。俺は何かしらんお前に望を掛けていたよ。正直のところね。ところが御覧のとおりの有様だ。お前は、いきなり家の誰れ彼れを掴まえてお説教を始める。それでこの家の有様はどうだ。恭はお前を避けて益々玉突きに凝る、由紀は探偵犬みたいに神経過敏になる、俺は俺で望の綱が切れて濡れた捨て犬御同様だ。喜美子は親を離れだすし。俺は知ってるよ、あれがお前を家中の誰より好いてるってことをね。

邦子　――。

間

邦子　お父さん。あたしにお金呉れない？　以前あたしに呉れる筈だった、あれがあるでしょう。

行道　……。

邦子　立人が失敗したんです。詳しく言ってもいいんですけれど、興味が無いかもしれないから肝心のことだけ言っとくわ。それだけでお父さんは充分心が決まるでしょう、呉れる？　呉れない？

行道　その金を持って、どうするんだ？

邦子　も一度此処から行っちまうつもり。

行道　どういう失敗だ、言ってみないか。

邦子　長い間かかって考えた機械がやっと出来上ったのです。その機械が、駄目になっちゃったんだ。つまり、工場、それがね、工場にやっと据えつけが出来たのよ。

行道　それで？

邦子　駄目になったのよ。何だっていいじゃないの、訊かなくったって。あたしには言えやしない。どうでもいいのよ、そんなこと。

行道　出て行かなくったって、金があればやり直しが出来るんだろう。

邦子　そうじゃないの、あたしがまい戻って来たのはまるで間違ってたのよ。みんなお互いに

もう了解することが出来ないほど遠くなっていたんだものね。あたしはね、こう思ってたの、この家じゃ、みんながみんなを理解すること出来なくなっている。けどあたしは長い間家の人間でなかったのだから何とかしてみんなをうまくやってゆけるかもしれないと、そう思ったの。それはあたしの自惚れだったらしいわ。ほんとは、あたしがこの家を理解してなかったらしいんだ。あたしはこういう人間だから、細いところはやっぱり解ってないんだ。あたしにははっきりわかったわ、あたし達はどうしても分り合うことは出来ない。ただ、はっきりしてるのはあたし達がみんな血続きの他人になって了ってるってこと。ね。

行道　そうか。それは、そうかもしれないな。恐ろしいことだが、一度罅（ひび）が入ってからはな。

邦子　あたしには、みんなの気持が少しづつわかっています。ただ、それをどうしていいのかわからないのです。あたしのしようとした仕方が間違ってたんだものね。

行道　何とも相済まん次第だ。その気持は多とするよ。行く気かね、やっぱり。

邦子　そうきめたいと思うの。

行道　そうか。恭夫婦もその方が安心するかもしれんよ。

邦子　――。

行道　一言無かるべからずというところだな。

邦子　――。

行道　俺はな、僻んでいるかもしれんよ。しかし、あれ達が不安になるのはわかるよ、そういう気持はね。分かるかい？　姉弟（きょうだい）だってそれは別さ。

邦子　――。

行道　俺達は人間なんだ、なあ。

邦子　わかったわ。よくわかった。

行道　兎に角、お前はあんまり長い間留守にしていたよ。

邦子　ほんとにね。

行道　その間に俺はお前を見失ったかもしれない。しかし全然探がさなかったわけじゃない。ただ探がし方は間違っていたかもしれんさ。そうだろう。

邦子　そうよ。それはそうよ。

行道　それは大きな過ちだった。

邦子　あたしだって間違ってたんだ。やっぱりね。でもやっぱりあたしもそのつもりで帰って来たのよ。可笑しな話だな。みんなの欲しがっていたものは全く同じものだったのに、こんなことになってしまうなんて。

行道　金はやる。恭には黙って持って行って呉れ。

邦子　有難う。

行道　子供の時分もそんな風にしてものをせびったよ。呉れるか呉れないかどうだ、っていう

やり口でね。

邦子　脅迫だって言ったわね。

行道　喜美子はそんなことをしないぜ。

邦子　どっちの方がいい？

行道　俺は嫌いじゃないよ、あれはね。好きになれないだけさ。

邦子　好きになればいいじゃないの。

行道　させて呉れないさ。

邦子　銘々が為(し)たいことを為たらいいと思うの、あたしは。でなかったら銘々が他人の為て欲しいことを為てやるのよ。この家じゃ、為たいことも為ないし、為て欲しいことも為てやらない。みんながそうなって了ってる。あたしはしたいだけのことをしたんだから、今又この家を離れたってちっとも淋しくないのよ。みんな自分の責任だと思ってるものね。みんなに済まないとは思ってるけど。

由紀、喜美子。

由紀　さあ喜美子、お祖父さんにお詫びして下さい。喜美子はお祖父さんを恐がってなんかいやしません。それからお父さん、あたしがお伴しますからどうぞ御一緒に病院へいらっ

して下さい。あたしは何時でもいいんですの、何時でも……。

行道　由紀！（怒りを押さえている）

邦子　お父さん。

行道　だまってろ。俺は怒ってる。いいか。怒ってるんだぞ。お前、よく考えてみろ、それでいいかどうか。

由紀　――。

行道　これから、二度とこういうことがあったら、俺はお前の頬っぺたをぶんなぐる、いいか。一体何だってお前は、そんなにまわりくどい先くぐりばかりしてみんなを焦々させるんだ。そんな莫迦々々しい真似はいい加減に止してくれ。

由紀　――。

長い間。

行道　喜美子。叔母さんはまたどっかへ引越すそうだ。

喜美子　――。

行道　短い間だったな。

喜美子　――。

行道　泣かなくったっていいよ。いや、泣いたっていいがね。しかしどうにも仕方がないよ。

喜美子　（邦子に）嘘でしょう。

邦子　（微笑んで）ほんと。

恵美子　どうして？　何故行っちゃうの？

邦子　行かなきゃならなくなったから。

喜美子　何処へ行くの？

邦子　（話している間にだんだん激してきて）喜美さん、あたしは、あなたが好きだ。とっても好きだよ。お父さん、ほんとでしょう。いい子でしょう。こんないい子が自分のお祖父さんを恐がるだろうか。由紀さん、こんないい子が、母親を莫迦にしたりするだろうか。ねえ、間違っちゃ駄目よ。あなた方はみんな他人をとおしてこの子をみてるのよ。もっと大事にしてやってね。ほんとに、お願いしてよ。あたしは、この子が好きなんだ。何が間違っても、あたしはこの子だけは見違ってやしないわよ。あなたがた、そんな風にしていたら、この子も、すっかり意久地なしのヒステリー女になっちまう。それだけは我慢がならない。（部屋から飛び出して行く）

間。

由紀　お父さん。お姉さんは、お金が要るんです。

行道　聞いたよ。

由紀　上げて下さいます？

行道　やることにしたよ。

由紀　どうして、また出てゆかれるんでしょう、それなら……。

行道　俺にもわからん。

由紀　解りませんわ。あたしには。

行道　その方がいいかもしれんよ。あれが家にいたってちっともいいことなんて無いじゃないか。

由紀　どうしてでしょう。随分賑やかになったじゃありませんか。

行道　それはそうだ。すこし賑やかすぎるだけのことさ。

由紀　あたしが悪いんだったらそう言って下さいまし。でも、今また、お姉さんに行かれちゃ、困りますわ。

行道　俺に義理立てはしてくれなくてもいいよ。あいつは、あんな女さ。

由紀　どうしても停めなくちゃいけませんわ。

行道　停めることは俺が禁じるさ。

由紀　何故、どうしてですの。

行道　理由なんか、どうだっていい。

由紀　ちっともよかありませんわ。御自分の子供をどうしてそんな風になさるんです。以前一度あんなことがあって充分な筈じゃありませんか。

行道　お前は今迄そんな口を利いたことは一度もなかったぜ。兎に角いかん、いかんと言ったらいかんよ。あれが出て行くというのだから放って置け。

由紀　いいえ。お父さんがお禁じになったって、あたしはお言いつけどおりには出来ません。今更お姉さんに行かれちゃ、あたしやって行けません。こんな暮しはもうたくさんです。

（出て行く）

間。何処かで時計が四時を打つ。

行道　喜美子。こっちへ来ないか。

喜美子　ええ。

行道　掛けたらどうだ。椅子をもっとストーブに寄せるんだ。そう（喜美子の手に触れて）冷たい手をしてるじゃないか。俺の方が暖いじゃないか。寒くないのか、お前。

喜美子　ううん、そうじゃない。

行道　涙を拭け。よく泣くぜ、今日は。

喜美子　だって……。

行道　叔母さんが行ってしまうので悲しいのか。

喜美子　わからないの、なぜか。

行道　泣いたって仕様がないさ。スケートは大分上手になったのか。

喜美子　──。

行道　あんまり転ばんようにしろよ。時々は転ぶのか？

喜美子　いいえ。

行道　それじゃ、よっぽど上手い方なのか。

喜美子　そうでもないけど……。

間。

行道　（ぽつんと呟く）俺だって、どうしても行かせたいっていうわけではないさ。

──幕──

底本　森本薫戯曲全集
著者　飯沢匡　等編
出版者　牧羊社
出版年月日　1968